

様式（7）

報告番号	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px; display: inline-block;">甲 保</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">第 48 号</div> 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	日坂 ゆかり
題 目	Nurses' Awareness and Actual Nursing Practice Situation of Stroke Care in Acute Stroke Units: A Japanese Cross-Sectional Web-Based Questionnaire Survey （急性期脳卒中ユニットにおける脳卒中ケアの看護師の認識と実際の看護実践状況：日本 の横断的Webベースのアンケート調査）
<p>【目的】</p> <p>本研究の目的は、日本の脳卒中ケアユニット（以下SCUとする）に勤務する看護師が、急性の脳血管障害（以下CVAとする）患者に提供する看護実践の認識と実際の実践状況、更に、認識と実践の差を明らかにした。また、看護実践の状況と看護師の属性による差を明らかにした。</p> <p>【研究方法】</p> <p>研究方法は、横断的なウェブベースのアンケート調査を1,040人のSCUに勤務する看護師に実施した。本研究は横断的観察研究のための、ステートメントチェックリスト（STROBE）に従って実施した。質問項目は、研究者が作成した52の急性CVA患者への看護実践項目を使用して、必要性の認識と実践状況をそれぞれに5段階で質問した。参加者の特徴は、専門看護師や認定看護師の資格の有無、急性期CVA患者への看護経験年数、病院の病床数、SCUの病床数などを質問した。本研究は、岐阜大学倫理審査委員会（承認番号：2020-228）の承認を得て実施した。</p> <p>【結果】</p> <p>必要性の認識の52質問項目を使用した探索的因子分析により、因子負荷が0.4を超える以下の8つの因子が特定された。第1因子：日常生活動作の再構築、第2因子：患者と家族への精神的・社会的苦痛の軽減、第3因子：身体的変化の把握、第4因子：再発リスクの回避と退院支援、第5因子：セラピストとの協働、第6因子：身体的苦痛の軽減、第7因子：重篤化回避、第8因子：適切な身体管理。8つの因子の急性CVA患者への看護の必要性の認識と実際の実践状況の平均の差のt検定の結果、すべての因子で必要性の認識よりも実際の実践が低かった（$p<0.001$）。第3因子：身体的変化の把握は、必要性の認識と実際の実践の両方で他の因子より高かった。第5因子：セラピストとの協働は必要性の認識で最も低く、第2因子：患者と家族への精神的・社会的苦痛の軽減は実践状況で最も低かった。急性CVA患者への看護実践の状況と認定看護師や専門看護師の資格の有無の比較では、第3因子：身体的変化の把握で有資格者が有意に高かった。SCUの病床数での2群比較では、1～9床の群が第5因子：セラピストとの協働が有意に高かった。所属施設のベッド数や急性期CVA患者への看護経験年数の比較は、ウェルチのANOVAで分析した。結果、病床数が多い方が有意に高かった。また、急性CVA患者への看護経験年数は、20年までは年数が多いほど有意に高かった。</p> <p>【考察】</p> <p>本研究では、日本のSCUに勤務する看護師の約32%からデータを収集し、急性CVA患者への看護実践の認識と実際の実践状況を明確にした。平均値が低い因子が明確になり効果的なオンザジョブトレーニングの実施が可能となった。特に小規模施設やSCUの病床数が10以上で必要である。更にSCUでの認定看護師の配置を促進することで、看護実践の向上が示唆された。</p>	